

聖書：ヨハネの黙示録 11：1～14

説教題：わたしの二人の証人

日時：2021年4月18日（朝拝）

今、私たちは7つのラッパの幻について見えています。先に見た7つの封印の幻と同様、第1～第7の幻で主の復活から再臨の日までの全歴史を示しています。すでにラッパの幻の第6まで見ましたが、第7の幻の前に挿入部分があります。これは7つの封印の幻でも同じでした。今見ているラッパの幻では神に逆らうこの世へのさばきが記されて来ました。そのさばきは神の民を対象としていないことが9章4節で言われていました。そしていよいよ第7のラッパのさばきが記される前に、神の民・教会はこの期間どうであるのかということが10章1節から11章13節までの挿入部分に示されています。前回は前半の10章全体を読みました。そこでヨハネは神の巻物を受け取り、これを食べ、これをもって預言せよ！と言われました。教会はラッパのさばきが行われている間、ただ傍観しているのではなく、果たすべき役割がある。それは受け取った神のことばの宣教です。前回は預言せよ！という派遣のところまでを読みましたが、続く今日の箇所では、この派遣に基づいて宣教の使命に当たる教会の姿が描かれています。

まず1節に、杖のような測り竿がヨハネに与えられて、こう告げられたとあります。「立って、神の神殿と祭壇と、そこで礼拝している人々を測りなさい。」これは文字通り、神殿の測量をなさいという意味ではあり得ません。なぜならヨハネが黙示録を記した紀元90年代にはすでにエルサレム神殿は破壊され、存在しなかったからです。ですからこれは象徴的な意味であると考えられます。神殿は何を意味するでしょう。それは教会です（Iコリント3章16節）。また神殿と一緒に語られている祭壇とそこで礼拝している人々とは、神の民・教会が祈りをささげ、神を礼拝する共同体であることを示しています。それらを測れ！とは、神が教会のことをよく知っておられ、心にかけておられること、そしてこれを配慮し、守ってくださることを示しています。

しかし2節に「神殿の外の庭はそのままにしておきなさい。それを測ってはいけない。それは異邦人に与えられているからだ。」と続きます。これは一見、異邦人すなわち神の民でない者たちには神の守りが無いということを言っているように読め

ます。しかしそう取る場合の問題は、神殿の外の庭は異邦人のためのものであって、神に属するものでないということになることです。しかし神殿の外の庭も神殿の一部であり、神のものであります。ではどうして神殿の外の庭は測るなど言われているのでしょうか。有力な解釈は、これは神の民の外側の部分、肉体的な部分を象徴しているというものです。神殿の外の庭は異邦人の庭として異邦人はそこまで入ることができます。異邦人はそこに入り、そこを踏みにじることができます。しかしそれ以上、内側には入り込めません。このことは神の民でない異邦人は神の民の外側の部分は攻撃できるということを意味します。教会は厳しい環境に置かれたり、社会的に迫害されたり、さらには肉体的な命を取られることもあり得る。しかし異邦人が入り込めない領域すなわちその内側までは手を下せない。そこは神がしっかりと守り、祝福してくださる。マタイの福音書 10 章 28 節：「からだを殺しても、たましいを殺せない者たちを恐れてはいけません。むしろ、たましいもからだもゲヘナで滅ぼすことができる方を恐れなさい。」 教会は肉体的には外からの攻撃を受けるかもしれませんが。外の庭は異邦人に与えられています。ですからその部分は踏みにじられるということが起き得るのです。

それは「42 か月の間」とあります。この数字はこの後も繰り返し出て来ます。3 節に 1260 日と出て来ますが、これと同じです（一か月を 30 日とすると 42 か月は 1260 日）。また 12 章 14 節に「一時と二時と半時の間」という表現が出て来ますが、一時を一年とすると合計 3 年半となり、42 か月、1260 日と同じです。これはダニエル書 7 章 25 節、9 章 27 節、12 章 7 節、11～12 節などをもとにした言葉です。このダニエル書における 3 年半の有力な解釈は、エルサレム神殿崩壊（紀元 70 年）から主の再臨の日までの期間を指すというものです。ですからこれは黙示録が書かれた 1 世紀から主の再臨までの全期間を指すと考えられます。この期間、神の民・教会は、その外の庭については踏みにじられるという苦難の中に置かれるのです。

私たちは教会についてのこの 2 面性を良く押さえておくことが大事だと思います。教会は外的な部分については攻撃にさらされています。外の庭は異邦人に与えられています。ある意味で彼らのしたいようにできます。しかしその内側の最も肝心な部分については、神の完全な守りと配慮の中にある。いくら敵であっても、そこまで入り込んで神の民を滅ぼすことはできない。神がご自身との関係を守り、彼らが永遠のいのちの祝福に生き続けるように、滅びに至ることがないように、しっかり

守っていてくださるのです。

このような神の保護の中にある教会の使命が3節以降に記されます。3節：「わたしがそれを許すので、わたしの二人の証人は、粗布をまとって千二百六十日間、預言する。」ここに出て来る「二人の証人」とは教会のことです。それが二人と言われているのは旧約聖書に証言は二人以上によってなされると言われていることと関係すると思われます。また「粗布」は来たるべきさばきと悔い改めを宣教する教会の姿を示しているのでしょうか。1260日は、先に見た通り、1世紀以降の全歴史を指します。その教会について4節で「彼らは、地を治める主の御前に立っている二本のオリーブの木、また二つの燭台である」と言われます。燭台はすでに教会を指す象徴的表現として1章に出て来ました。一方のオリーブの木は燭台の明かりのための油を提供するものです。これはゼカリヤ書4章の幻を下敷きにしています。ゼカリヤ書4章3節、11節、14節では燭台の右と左に2本のオリーブの木が出て来ます。その油は聖霊と関係することが4章6節で次のように言われています。「『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって』と万軍の主は言われる。」つまり二人の証人である教会は聖霊の力によって光を輝かせ、証しをする教会として描かれているわけです。

その教会の宣教における守りと権威が続く5～6節に記されます。まずその守りが5節です。ここを読むと、一体これは何だろうかと思わず困惑してしまいそうですが、1～4節がすべて象徴的表現であったように、5節もそう読むべきでしょう。この5節は教会の証しのことばが持つ力を語っていると思われます。参考になるのは1章16節でキリストについて「口から鋭い両刃の剣が出ている」とあったことです。「口から出ている」とあるのは、キリストの言葉が剣のような力を持つという意味でした。11章5節も「口から火が出る」とあります。つまり教会が語ることばの力をこれは意味します。逆らう者に対して、神を証しする教会のことばは火で象徴される神のさばきをもたらす。実際に口から火が出るわけではなく、火が象徴するさばきを、どういう形かで相手にもたらす。またこの力が彼らのことばに伴うので、これを忠実に宣べ伝える教会は、その神のことばの力によって守られることが5節後半で言われています。

6節は教会に与えられている権威についてです。前半の「預言をしている期間、

雨が降らないように天を閉じる権威を持っている」は I 列王記 17～18 章のエリヤの姿を、また後半の「水を血に変える権威、さらに、思うままに何度でも、あらゆる災害で地を打つ権威を持っている」は出エジプト記におけるモーセの姿を指しています。つまりあの彼らに伴ったような神の権威が、みことばを宣教する教会に伴うのです。もちろんここも今日の私たちへの適用においては、文字通りではなく、象徴的に解釈すべきです。教会が神のことばを宣べ伝える時、あのエリヤの時代に雨が降らず、反抗する人々が困ったように、今日も（どういう形かで）そのように人々の上に臨む神の力が教会の宣教に伴う。あるいはモーセの時代に水が血に変わり、反抗する人々が困ったように、今日も（どういう形かで）そのように人々の上に臨む神の力が教会の宣教に伴う。私たちは人々に無視され、捨てられて終わりになるように弱々しい言葉を語っているのではなく、そこに伴って働き、大きなみわざをなす神の権威を与えられて遣わされているのです。その約束を信じ、心に留めて、重大な宣教の務めに当たるように！ということです。

しかし 7 節を見ると「二人が証言を終えると」と出て来ます。これは教会の宣教が終わりとなる歴史の最後の局面を描くものと考えられます。その時、底知れぬ所から獣が上って来る。獣は 13 章以降に出て来ます。それはダニエル書 7 章を背景としています。「底知れぬ所」については 9 章で見ました。つまりこれはサタンに従い、サタンの手下となって、神と教会に敵対する存在を指すと考えられます。その獣が現れて、二人の証人すなわち教会は打ち負かされてしまいます。「殺される」と表現されるほどの状態になります。8 節は教会がこの世から受ける侮辱的な扱いのことです。これは神と教会に対抗する世界の姿を描くものです。ソドムやエジプトと出て来ますが、どちらも旧約聖書で神に逆らい、神に従う者たちを苦しめた町でした。またイエス様もこの世において十字架につけられました。9 節で全世界の人々はその死体を葬らないとあります。三日半の間、眺めている。それどころか 10 節では教会の死を喜び祝い、互いに贈り物を交わすとあります。「この二人の預言者たちが、地に住む者たちを苦しめたからである」と。5～6 節で見た通りです。教会の宣教のことばに耳を貸さない人たち、受け入れない人々にとって教会は邪魔でした。面白くない存在でした。自分たちに悔い改めやさばきについて語って来る。それによって良心が責められ、その心がかき乱される。色々不吉なことを考えさせられたり、経験させられたりもする。そんな教会が消滅したようになり、語る声が聞こえなくなって喜ぶのです。これでせいせいした！これで我々の思う通り、苦しめられ

ずに生活できる！と。

ところがその教会が三日半の後、復活すると 11 節以降に言われます。この 3 日半は、先に見た三年半すなわち 42 か月、あるいは 1260 日と関連するものです。3.5 という数は同じですが、こちらは 3 日半です。つまり教会が死に服するのはわずかの期間。その後で何といのちの息が二人の内に入り、彼らは自分たちの足で立ちます。エゼキエル書 37 章の干からびた骨が生き返る話が思い起こされます。あのように教会は死からいのちへと復活する。このことを思うと 3 日半という数字はイエス様の死からの 3 日目のよみがえりも私たちに思い起こさせます。人々はこれを見て大きな恐怖に襲われます。そして教会は天に上げられます。世の人々が断罪し、葬り去った教会を神は天へと導かれた。人々はそれを見ます。「そのとき、大きな地震が起こった」と 13 節に続きます。都の 1/10 が倒れます。1/10 ですからまだ最後のさばきの日ではありません。しかしその明らかな前兆です。このあたりは第 6 の封印の幻が記された 6 章 12～17 節と似ています。最後の日直前の状況です。残った者たちは恐れを抱き、天の神に栄光を帰すとありますが、これは悔い改めて信じる者になったという意味ではありません（ピリピ人 2 章 11 節）。そうしていよいよ主の再臨を迎えることとなります。「第二のわざわいが過ぎ去った。見よ、第三のわざわいがすぐに来る」（14 節）と述べられ、いよいよ第 7 のラッパの場面を次回、私たちは見ることとなります。

以上、宣教の使命に生きる教会の姿についての幻を見て来ました。まず大切なことは最初に見た教会の二面性を良く心に刻むことだと思います。教会には神の守りがあります。しかし外側のこと、外面的なことについてまでは守りの約束がありません。神殿の一部である外の庭は踏みにじられます。その部分までは敵対者たちが攻撃できます。神はそのことを許しています。そういう意味で教会は傷つきやすい存在でもあります。しかし異邦人が入って来れない中心的領域については確実な神の守りと配慮があります。この神がともにいてくださることを信じて、教会は宣教の務めに当たるように招かれています。その場合も自分の力によるのではなく、聖霊の油によって燭台としての光を輝かせるようにと。またその働きをする中でも、神のことばを取り次ぐ者たちには上からの守りと権威が与えられています。

しかしやがて究極的な苦難が訪れる日が来ます。教会が消滅したかと思えるよう

な時が来ます。その死体が放置されるような日が来ます。しかしそこからまさかの復活が最後に導かれます。ここでの様々な表現はイエス様の姿と重ね合わせるような仕方で表現されています。「主も十字架にかけられた」と8節にありましたし、3日半という表現もありましたし、復活して「雲に包まれて天に上った」という姿もイエス様と同じです。教会はイエス様と結ばれており、イエス様と同じ道を通り、ついに天に上げられるのです。ですからこのことを心に刻み、確信をもってこの使命に邁進したいと思います。主は教会のことを「わたしの二人の証人」と言われました。またオリーブの木、燭台とも言われました。神は教会を守り、教会を用いてご自身のご計画を実現されます。このことに励ましを受けて、受け取ったみことばを神の力によって忠実に証しし、ついに栄光へと上げられることに至る「二人の証人」、神の神殿なる教会の歩みへ導かれたいと思います。